
我の小説は偉大なり

石本公也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

我的小説は偉大なり

【NZコード】

N9079X

【作者名】

石本公也

【あらすじ】

「部活くらい入った方がいいよ

親や友達にそう言われて、俺は文芸部に入った。其処にいたのは、自称
天才小説家。しかもその文芸部は、同好会としても認められていないただの集まりだった！

其の者、明らかに異常なり（前書き）

」の物語を見つけて下せりて、ありがとうございます。彼らを見て、面白いと思つて頂けたら幸いです。

其の者、明らかに異常なり

「部活くらい入った方がいいよ」
親や友達にこう言われた俺は、その扉の前に立つて、扉を開けた。
「なんだ君、新入部員か？」

「あーっ、ようやく授業終えたーー！」

今日最後の授業が終わり、俺は大きく伸びをした。

「喜びすぎたっての。お前はこれから家に帰んのか？」

俺の後ろにいる男子生徒、誠人まさとが声をかけて来た。教室は授業が終わったからか、ガヤガヤしている。

「まあな。お前はこの後部活だっけ？」

誠人は、バスケットボール部に所属している。疲れた色々愚痴吐いてはいるものの、それでも続ける。

「ああ。お前も部活やつてみろよ。楽しいから」

誠人は笑顔で言った。その時、廊下から先生ホールームが入つて来て、ガヤガヤしていた教室が静かになる。先生はHRを始めた。

「楽しいってもなあ

俺達も声を落として喋り続けた。

「別にバスケに誘ってるワケじゃねえよ。お前も夢中になつて何かしてみろよって言つてんだよ」

誠人は俺が中学校はつまらなかつたとぼやいてたからだろうか、高校で何かさせたいらしい。正直思つ。オカンか。

「じゃあ検討してみるよ

俺はそう言つて鞄を持ち、立ち上がつた。

「良いトコ入れると良いな」

そうして帰りの挨拶をして、俺は帰つた。

俺は家について、まっすぐに自分の部屋に入り込んだ。ベッドの上に乗り、ゲームを起動する。

部活と言つても、俺は運動なんかできない。何かに一生懸命になるのは気持ちが良いのだろうが、疲れるのはいやだ。汗臭く泥臭く何かに一生懸命に打ち込むのは、爽やかスポーツマンがやつてる。そう思いながらゲームをプレイしていると、俺の部屋の扉が開いた。

「帰ってきたなんならちゃんと言つてよね。それに、ゲームばっかりしてるのは勿体無いわよ。それだつたら部活くらい入つたら？」母親だ。母は洗濯物を持つてすぐに出で行つた。それにしても、ゲームばっかりしてるのは勿体無いかあ。でも何にもする事なんか無いし、…………部活、ねえ。

そう思つた俺の前で、ゲーム画面はGAME OVERの文字を表示していた。

「部活つて、今更ながらどんなのがあるんだ？」

次の日の放課後、俺は誰に言うワケでなく、ポツリと言つた。だが後ろの席の誠人は聞こえてた様で、つつかつて來た。

「お前部活入るのか？どこにすんだよ？」

何故か目を輝かせて聞いて來た。

「だけど運動すんのは嫌だからな。樂なのはないのかな？」
「樂なのは無いと思うけど、運動が嫌なら文化系の部活に入ればいいじゃねえか」

誠人の言葉に俺は一瞬止まった。ゆっくりと後ろを向き
「そうだよ。文化系の部活があつたよ」

驚きの表情を隠さずに俺は言った。

「お前、部活には文化系もあるって忘れてただろ」
呆れた表情を隠さずに誠人は言った。

「誠人、文化系の部活って、どこに行けばあると思つ？」
「お前つい最近説明されてただろ……旧館にあるよ」

その言葉を聞いて、俺は立ち上がった。

「サンキュー」

そして、旧館へと、足を向けた。

其の者、明らかに異常なり。 2ページ

旧館についたは良いが、俺は何処の部屋に行けば良いのだろうか。旧館の中を回つてみると、一つの、少し古い感じの扉が田に付いた。俺はその扉の前に立つた。

ここも部室なのだろうか、だとしたらどんな部活をしているのだろう。

俺は、その扉を、勢いで開いた。

その中にいたのは、長く、美しい髪を讃えた美少女だった。その美少女は、俺に気付くと

小首をかしげ、

「なんだ君、入部希望者か？」

しっかりとした声で、そう言った。

「なんだ君、入部希望者か？」

グラウンドから野球部かサッカー部の掛け声が聞こえる午後の学校。そこの部室棟として使われている旧館の一室に入ると、美少女がいた。その人は、俺を見てそう言った。

「え…いや、なんて言うか、……見学？…みたいな感じで…」

俺は取り敢えず笑顔で答える。

「見学？なら君はまだ部活に入っていないのか！」

俺の前にいた美少女が、パッと顔を輝かした。と思ったら

「君、名前は？」

いきなり名前を聞いて来た。

「？…山陰龍夜」

なんで俺は答えたのだろうか、小学校とかで知らない人に名前を教えてはいけませんって習つたはずなのに…まあ、ここは学校だし、大丈夫か、

「では山陰君、今日から君は文芸部の一員だ。…あつ入部届けは我が顧問に出しておくから問題ないぞ。」

いや違つた。問題あつた。この人今なんて言つた？

「あ、あの！俺は見学に来た訳で入部するとは言つてないんだけど？」

「せつかく來た者をみすみす返すワケにはいかんな」

何時の間にか俺の背後に來ていた彼女は、ドアを閉めて、鍵をかけた。つて

「何してんの？」

俺は彼女に問いかけた。

「まあ落ち着けよ新入部員。今からこの文芸部について教えてやろう」

彼女は俺の質問を無視して机に腰掛ける。

俺はもうどうやつても部員になる様だ。しうがないので俺は近くにあつた椅子に座つた。

「文芸部とは、一般的に本を読んだり書いたりする部活だ」

そう説明していく彼女。窓の外は、もう暗くなりかけている。ふと、気が付いた事があつたので俺は彼女に問いかけた。

「ところで……他の部員は？」

すると、彼女は驚いた様にこちらを見た。何かいけない事でも聞いてしまつたのだろうか、しかし、他の部員の事を聞いただけでこんな反応するか？

俺が内心であたふたしていると、

「部員は……我と山陰君だけだ。」

彼女が静かに言つた。

この学校——公立 花山南高校は、部活動に色々とルールがある。よく生徒手帳なんかに書いてある決まりことだが、その中に、部員と部活と言つ項目がある。

部を作るとき、部として発足する前に、必ず同好会として発足しなければいけないのだが、その同好会には、必ず五人以上部員がいなければいけない。十人集まればぶに昇格出来る。だが元々部だった所が、廃れて行つた場合、五人未満になつたら即廃部と言つ悲しいシステムも存在する。

つまり、文芸部は、文芸同好会としても発足していない、ただ部屋を持つてゐるだけの集まりである。

この部——いや、この集まりは、まだ同好会としても活動で来ていらない。

そんな所に、俺は入部させられた。

部員は俺を含めて二人。もう一人は、ビックリしてしまった程の美少女だった。

「二人……？」

俺はつい聞き直した。どんな学校でもありそうな文芸部員が、だつた今入った俺を含めて二人？

「ああ、最近は漫画研究会の方が人気があるし、映画同好会に入れば、自分の作ったシナリオで映画を作ったりしているからな。地味な文芸部には、誰も入らない」

そう言って悲しそうな顔をする少女。

「じゃあ、なんでお前はそっちにいかないんだ？ 映画とかにして貰えるんだろう？」

「お前と呼ぶな。私は日之道灯だ」

美少女——もとい灯は、そう言うと机から降りた。そして部屋を暫く歩き周ったあと、大きく息を吸って灯は言った

「我が文芸部に居るのは……我が、天才小説家だからだ！」

……えつ？

今こいつはなんと言った？

「天才小説家？」

ナルシストなのか？

「ああ、我はこの学校で才能を見せつけ、ゆくゆくは、大きな場所で小説を書くのだ！だが文芸部が活動出来なければ意味が無い。そこに山陰君が来てくれたのだ」

少し興奮気味ではなす灯。別にデビューしたいなら部から始めなくともいいと思うのだが……でも天才小説家って自負してるんだよな。だつたら……

「自分の事を天才小説家と言つくらいなんだから、小説は書いてんだよな？見せてみろよ」

俺は椅子から立ち上がりて灯に言った。
灯は、「良いだろう」と言って部屋に一つだけある棚から、数枚の紙を取りだした。

灯が差し出した紙を受け取つて、俺はそこに書いてある文字を見て
「小学生の作文か！」
かなり大きい声で叫んだ。叫ぶしか無いだろう。
だつてそこに書いてある文章は、

ある所に一人の人人がいました。

その人は異世界に行きました。

その人は異世界から帰つてきました。

ハッピーエンドです。

……かなり、いやほんと、いやまさに超がつく低レベルだった。

「小学生の作文？この我の文章を読んでの感想がそれか？」
灯が不機嫌そうな目を向ける。

「この文で才能を感じれたらおかしいだろ」

「なんだと？我の物語は稚拙ちせつと言うのか？」

「どう見ても幼稚よじゅだろ？なんで異世界に行つたのに異世界での事が書かれてねえんだよ！あとなんで一人称が我われなんだ？」

「何故今そこを…我と先程から言つていただろう。あと異世界での

事は思いつかなかつたのだ！」

「思いつかなかつたなら書くなよ！それより最後のハッピーエンドつてど！」——これハッピーハンドつて書くな！描^{トロ}しろよ最後ぐらい

！

出会つてまだ数分のはずなのに、なんで言^{トロ}い合^{ハシ}つ事が出来んだうつなあ俺達。

灯は、もしかするとそのまま俺に向かつてビームを発射しそうなほどに鋭い目つきで俺を睨んでいる。

「お前、我に意見するからには、小説を書けるのか？」

灯が睨んだまま俺に言つて来た。

俺は小説は書けない。だが、あの文章を見た後、灯にそ^トう言^{トロ}つのはなんか負けた氣がする。俺は多分、今相^{トロ}引^{トロ}きつた顔をしてるんだろう。

「……少なくとも、……お前よりは」

これ以上顔が引きつらない様にして、俺は言つた。

「……ならばお前が我をコーチしろ……」

「コーチ？」

てつくり今ここで書いてみると嫌味なことを言われると思つたのに、コーチしろ？

「ああ、山陰君は以外と我の文章に指摘していた。的確にな。だから君にコーチをお願いしよう」

的確つて……こんな文章に対する指摘なんて、誰でもできるだろ。しかし、灯は何か思いついた子供の様な顔をしている。顔の横に一ヤリと文字が見えそうだ。

「我的才能に君がコーチをする。そ^トすれば、きっとこの部活は学校で一番人気の部活になれるだろ」

学校一とは、大きな事を言つもんだ。

「どうだ？文芸部を人気の部活にしてみないか？」

灯は、俺をまっすぐに見つめて、不思議と楽しそうな表情で問いかけてきた。

まあ俺も、この時は目を輝かせていたらしいが。

「学校一人気の部活ね。だがお前の今の文章力で物語を書いていたら無理だろう。：良いぞ、文芸部に入つてやろう」

「ならば、決まりだな」

この物語は、花山南高校文芸部の、今や伝説になりかけている活動記録。

其の者、明らかに異常なり 3ページ（後書き）

いんにちは、石本です。

読んで下さった方に大きな感謝を。

文章力の無い自分が、文芸部で文章の物語を書くのは、あまりにも
無謀ですが、頑張っていきます。

さあ次回は、始まる部活。
お楽しみに。

其の部、ようやく始まつたものなり 1ページ

学校で一番人気の部活にする。

そうは言つたが、文芸部は、まだ同好会としても成り立つていない。と言つ事は、活動が認められるためには、部員集めが必須という事になる。

灯にこの事を話すと、灯はそんな事最初から知つてゐると言つ様に溜息をついた。

「入部して一日で氣がつくのは良いが、当たり前の事を言わないでくれ」

そう言つて灯は、わざとらしく顔を覆つ。

「で、どうやって集める氣だ？」

部員は集めなくてはならないが、もう五月だ。殆どの人は部活を決めてしまつてゐる。この状況で部員が簡単に集まるのか？

「とりあえず、ビラでも作ろ。なんでも良いから五人集めないと、我の小説を発表出来ない」

お前の文じゃ発表しても売れねえよ。

「ビラか…本当に効果があるとは思わないんだが……無いよりは良いか」

ただ、ビラなんて作つても、貼る場所なんて無いだろうが。

「あとで当然に誰か誘うしか無いだろうな」

灯は結構真面目に考えていた。

確かに、部として認められていない団体が、校内放送を使つたりは出来ない。結局、誰でも利用出来る設備を使つしかない。

「ところでビラって、どこに貼るんだ？」

俺はふと疑問に思つた事を灯に聞いた。灯は部室に一つだけある大きな棚から、真っ白な紙を取り出しながら言つた。

「そこら辺の壁にでも貼つておく。まだ部員募集の紙が剥がされてないんだ。新しいビラがあつたって大丈夫だろ。」「

灯は俺の方に紙を数枚渡して、筆箱からペンを取り出した。

「……この紙は何だ？」

何も言わずに紙だけ渡されても、なにをするのか分からぬ。俺が聞くと灯が

「ビラを考える」

短く返事をした。灯の手はもうペンを走らせている。俺も何か書いてみようとしたが、このビラと言つ物。なかなかに難しい。まず何をする部活かを書かなくてはならないし、人を惹きつける言葉も必要だ。だが俺は昨日入れられたばかりだし、この部屋の構造すら理解していない。

とりあえず俺は、本のイラストの上に「文芸部員募集！」とだけかいておいた。

「出来たなら人目に付きそうな場所にはつておけよ、薄汚れた倉庫に貼つても意味がないのは分かるだろ？」

灯はそう言って立ち上がった。もうすでに何枚ものビラがその手にある。

「帰りにビラを貼る事。勧誘は明日にしよう」
じゃ、また。と灯は部室を出ていった。そのあと、結局一枚しかできなかつたビラを持って、俺も部室をあとにした。

「で？お前はどこの部活に入ったんだ？」
次の日、誠人が教室で俺に聞いてきた。

「文芸部」

俺は短く答えた。

「 文芸部？ そんな部があつたか？」

誠人は嘘つき少年を見る様な目をしながら言った。

「 実際にはない。 部員も一人だしな。 部室は一応あるけど、 顧問もいないし、 同好会ですらない」

俺は机の上でほおずえをついていた。

誠人は後ろの席から身を乗り出してきた。

「 一人？ ジヤあ、 もう一人は誰なんだ？」

「 日之道 灯つて言う人だよ」

俺がそう言つと、 後ろから驚きの声が聞こえる。

「 日之道？ お前、 あの日之道さんと同じ部活なのか？」

何だ？ 知つているのか？

「 知つてるも何も、 同じ学年だろ？ しかも日之道さんつていやあ、 この学校で指折りの美人じやねえか」

驚いた。 灯は同学年なのか。 ついつい灯と言つていたが、 先輩だと思つていた。

しかもかなりの美人。 そんな人が、 文芸部で部員を集めていた……。 直ぐに部員が集まりそうだ。

「 で、 何でお前が日之道さんと同じ部活なんだよ」

誠人がじつとりとした目を向けてくる。

それは警察官の様に、 絶対に吐かせてやるぞと言つている様だ。

「 文化系の部活を見ようと思つて旧館に行つたら、 文芸部に入れられたんだよ」

段々答えるのが面倒になつたので、 適当にこたえていく。

「 入れられたじやねえよ。 何で日之道さんはお前なんかと文芸部にいるんだと聞いてるんだ」

誠人、 お前しつかり言葉を理解してゐるのか？ 俺はどうして文芸部に入つたかを語つたのに、 似た様な質問ぶつけやがつて。

そう言おうとした時、 教室に先生が入つて来て、 この話は自動的に切り上げとなつた。

其の部、みづやく始まつたものなり 2ページ

授業が全て終わると、再び誠人が問いただして來た。ここには俺の答えに納得してない様で、いい加減しつこい。

「だから、どうやって日之道さんに取り入つたんだよ」

「しらねえよ。扉開けたら入部させられたんだから」

「どうやつて入部させられる程親しくなつたんだ？」

さつきからこなんがずっと続いてる。もうやめて欲しいと思つた時だった。

廊下の方が騒がしいと思つたら、話題の中心人物、日之道 灯が顔を出した。

「山陰君はいるか？」

灯は教室の入り口に立ち、俺を呼んだ。

そして俺に集まる視線。

俺が近づいていくと、灯は微笑み、

「私は今日少しよるところがあるから、部室の鍵を渡しておひつ。そう言つて俺に鍵を投げた。よるとこひつじに用事があるのか？あと今私つて言わなかつたか？」

とにかく俺は鍵を受け取り、背中に刺さる目線から逃れる為に、真っ直ぐ部室に向かう事にした。

部室について、俺は何もする事が無かつた。文芸部と言つても、この部屋には本が一冊も無い。俺には灯が来るまで何をしようか悩み抜いた挙句、椅子に座つてただじーつと待つ事にした。

俺が椅子に座つてただぼーつとしている時だった。部室のドアをノ

ツクする音が聞こえた。俺は灯が来たと思つて扉を開くと、そこには、いかにもおつとりとした女性が、柔らかな笑みを浮かべていた。「ここにちは、文芸部に入りたいのですが」

肩を超えている程度のセミロングの髪を揺らしながら、その人は言った。

「あの…？」

俺がしばらく動けないでいたので、その人はもう一度言つた。

「あ。すみません。どうぞ中に。」

我にかえつた俺は廊下で立たせてはマズイと思つて、彼女を中に招き入れた。その人は「はい。」と笑顔で言つて、中に足を踏み入れた。そして俺が差しだした椅子に座ると、

「ポスターを見たんです」

と言つて來た。ポスターとはビラの事だらうが、本当に人が来るんだなーなんて俺が感心していると、

「山陰君。遅くなつてすまな…」

灯がやつて來た。俺はこの入部希望者の事を話そつと灯の方を見て、固まつた。

何故か、それは灯の横に、綺麗な髪を軽く縛つた女の子がいたからだ。

灯も固まつていた。俺しかいないと思つていた部室に、穏やかそうな人がいたのだから。

完全にフリーズした俺達。

「ここにちは。」

「こ、ここにちは…」

そんな中、入部希望者達は、お互にあいさつをしていた。

「とりあえず、説明して欲しい」
灯が溜息をつく様に言った。その前で、おうとりとした人が座っている。どこかの面接か。

「説明？あの、ここ文芸部ですよね？」

少し困った様な表情をして、俺を見る。俺を見られても困ります。

「確かにここは文芸部だが……まさかお前、入部希望者か？」

灯が聞くと、彼女は文芸部と分かって安心したようだ、

「はい。一年三組、木茎葉 きくは 香織 かおり とります」

と笑顔で言った。てか、同じ一年生なんだ…

一方、灯も入部希望者と分かつて、香織さんを受け入れたようだ。

「そうか、ならば歓迎しよう。山陰君、今日は凄いぞ。なんせ新入部員が二人入ったのだから」

「二人？」

さつき灯が連れていたあの子だろうか。そういうや狄アザミに行つたんだ？

「紗良自己紹介してくれ」

すると、机の影からぴょこっと、灯が連れてきた少女が顔を出した。そんなどこにいたのか

「一年五組、原田 紗良。この部に入る」

そう言つて腕を組む紗良。ぶらつきぼうにしてるのではなく、子供が大人の真似をしている様に見えるのは何故だろう？

「ところで灯。お前原田さんと知り合いなのか？」

俺が聞くと、灯は眉をわずかに動かした。そして少し俯いて、顔をあげた。

「ああ、紗良とは同じクラスでな、いつも楽しく笑っているのに部活に入つてないと言うから、誘つたんだ」

そういう言われて、俺は紗良を見た。いや、紗良といきなり呼び捨てなのはやつぱりどうなのかな…まあいいか、心の中でだし。

「後一人で文芸部は正式な同好会になれる。だがその前に、せつかく入つて来てくれた一人を歓迎する。山陰。その棚から菓子を取り出せ」

そう言われて俺は棚に近づく。すると上段の方に、見た事ある袋が見つかつた。灯は部室に菓子を持ち込んでたのだろうか？

「お菓子？」

そして紗良が急に起き上がり、俺のてから菓子を取り上げると、勢い良く食らいついた。

その横で微笑んでいる香織さん。

「勢いが良いな。ところで山陰、部の活動つてどんな事を書けばいいんだ？」

「はい？」

俺は素つ頓狂な声をあげて灯を見た。

「ほら、ここに活動内容とその目的と書いてあるのだが、よく考えたら何を書けばいいのか……どうすればいいと思う？」

と言つて灯は俺に 新規部活動制作報告書 と書かれたを見せる。

「お前、この前文芸部は本を読んだり書いたりする部だつて言つてたじゃんか」

俺がそう言つと、灯は

「それだけでは…」

と、少し不安そうな顔をする。俺は頭をかいて、

「じゃあ俺が適当に書いておくから、その紙くれよ」

と言つて灯の手から紙を奪い取つた。灯はハツとして、俺の方を見たが、何も言えなかつた。何故かと言えば、灯が口を開こうとした時、紗良が

「お菓子、無いの？無くなつた」

と言つて来て、話が途切れたからである。

校内に、最終下校時刻を知らせる鐘が鳴つた時には、机の上に大量のお菓子の袋があつた。

食べ過ぎだね……

最終下校時刻を告げる鐘が鳴つたので、香織と紗良は帰つて行つた。俺は菓子の袋を片付けていた。灯はカギを持っているので、帰ろつとしないのだろう。

「山陰」

不意に灯が俺を呼んだ。

「なんだ？」

俺は袋を「ミミ」箱に押し込みながら言つた。

「その……わつき…我の事を、灯、と呼んでいなかつたか？」

俺に視線を合わせず、顔を横に向けている灯。しかし、その田はさつきからチラチラと俺の方を見ていた。

ここに俺は考える。灯と言つているのはあくまでも心の中で、呼ぶ時は【田之道】と呼んでいた筈だ。口にだして灯と呼んだだろうか？

「先程、紗良の事を聞いて来た時、我を 灯 と呼んでいた筈だと思つ……」

段々小さくなる声。俺はそれを聞いて、ああと呟いた。

——ところで灯、原田さんと知り合いなのか？——

あの時、灯が少し不思議な表情をしたのは、急に名前で、しかも呼び捨てで呼ばれたからか。

「確かに呼んでたな。…もしかして、いやだつたか？」

「嫌では無い。ただ、少し驚いてしまつただけだ」

「……………そういうやお前も、何時の間にか山陰つて言つてるな

「…………嫌か？急に名前で呼ばれたものだから、つい……」

「嫌じやない。てか、君とか付けられるとなんかこそばゆい。いつそ龍夜でも構わない」

なんの話をしているのだろうか？それなりに気まずい空気になつたので、俺は「じゃ、また明日」とつて部屋を出た。帰り道。俺はポケットから取り出した紙を見ていた。

新規部活動制作報告書。そこに書いてある事を読んでみる。

その一、部員数が五名以上いる事。そして、下の空欄に入部予定者の名前を必ず記入する事。

その二、活動場所を記入する事。他の部活動と場所が被っていた場合、学校の許可が降りなかつた場合は、認められない。

その三、活動内容とその目的を明確に記入する事。活動内容が学校の理念にそぐわない場合は、部として認められない。又、明確な目標がなければ、部として認めない。

…どうしたものかねえ。

一つ目は、あと一人集まればいいのだから、別に考えなくてもいい。二つ目は、もうすでにある。同好会としても成立つてない集りが、部室を持つてているのはおかしいのだが、お陰で考える必要がなくなつていい。

問題は三つ目だ。文芸部はどこの学校にもありそうな部だし、活動内容は簡単に通るだろう。だが目標がなければ部として認められない。なんかの賞に入るとかじや駄目だうじ、良い目標が浮かばない。とりあえず保留だな。

俺は空を見た。日が沈みかけている空は、色んなものが混ざり合つているように見える。

「まあ一応、文芸部は無事に発進する事が出来ましたーと」歩きながら、俺は呟いた。

其の部、めりあへ始めたものなり

4ページ（後書き）

冬なのにまだ浴室に扇風機があります。
早く止付けないと。
じかつーい。 ファイル001
お楽しみに。

其の者達、学校の人気者なり。 1ページ

文芸部、部長一（仮）

日之道 灯。

一年生の中で、いや学校の中でその姿はトップクラス。先輩だろうがなんだろうが関係なく人気を集めている。

今まで告白した人は少ないので、本人が呼び出しに全くと言つ程応じないからである。

人とはあまり話さないので、詳しいことは謎が多いが、笑顔を振りまく性格でないので、最も笑顔が見たい人N。・1と言われているらしい。

「で、この情報は何の意味があるんだよ？」

俺は持つていた紙を誠人に返した。放課後、教室を出ようと思つたら、誠人から紙を渡された。そこに書いてある事は、灯についてだ。俺は眼を通しながら、ストーカーとしてこいつを訴えようか考えた。

「お前なあ。ここに書いてあること、見てみろよ」

誠人は人とあまり話さないと書いてある所を指差す。

「あまり人と話さないあの日之道さんと、一緒に部活にいるってのが問題だ」

真剣な眼差しを向ける誠人。何なんだこいつ。

「だから？」

俺はほおずえをつきながら聞いた。

「どうしてお前が、日之道さんと一人で放課後一つの部屋にいるんだよ？」

「変な風に言うな！ それに今は一人じゃねえよ！」

「え？」

俺がそう言つと、誠人は驚きの声を上げた。

「二人じゃない？」

「ああ、昨日入部したひどがいるから、一人じゃない」

「なんだそのうらやましい奴は……」

拳を強く握る誠人。

「一応言つておくが、野郎じゃないからな？」

「えつ？じゃあ誰だ？」

キヨトンとして、俺を見る誠人。

「確かに木茎葉さんと原田さんだ。じゃあ俺は部活に行くから」

そう言つて俺は教室を飛び出した。

「遅くなつた理由がそれとはな……」

灯がこちらをジト目で見る。俺の後ろで沙良と香織がこちらを向いている。俺は重たくのしかかる重圧感に耐え切る自信がわからなかつた。油汗がヤバイ。

「まったく、日頃から我を見る奴が多いとは思つていたが、その様な物まで作られてはいるとは」

はあーっと大袈裟おおげさに溜息をつく灯。俺は見ただけなのに、なんでこんなに緊張しなきやならないのだろう。

「でも、それは灯さんがとても魅力的に思われているからでしょう」

香織さんが呑氣のんきな声で言つた。それを聞いた灯は横を向いて

「そ、それなら思うだけにして欲しいものだ。いくら我が魅力的と言つたつて、我のデータの様なものを勝つてに作られていると言うのは気に食わん」

と言つ。

「無視。彼等が勝手にやつてるだけ」

沙良は呆れた声で言つた。こいつは手短に話してくれ。

「ああそつそつ、その紙に書いてあつたんだが、人とあまり喋らな
いつてのは、本当か？」

こいつ、ここ数日文芸部に居ただけでも、人とあまり喋らない様には見えなかつたからな。

だが俺が聞くと、灯は俺に向かつて、複雑な表情をした。

「答えない」

灯が冷たい声で言つ。何か怒らせてしまつたのかな?顔がこわばる。香織さんと紗良は、無言で俺を見ている。

「我的小説に堂々意見するものだから、そういうものはわきまえてると思つていたが…」

溜息をつく様に言葉を出した。

「おい、わきまえるも何も、疑問を口にしただけじゃねえか」

「疑問に思つたからと言つて、何でも聞いていい訳ではないでしょう?」

香織さんが言つた。灯は

「まあ、まだお互い知らない事だらけだしな」

と、諦めた様に言つた。俺はなにがなんだか分からぬままだった。

其の者達、学校の人気者なり 2ページ

一年三組

木茎葉 香織。文芸部。

穏やかで、大人しい、神秘的な人。どんな人にも優しく、彼女を取りまくオーラに当たられるだけで幸せな気分になれる。眞面目で、成績も良く、先生からの信頼も厚い。もちろん勿論、告白する者は後を絶たない。

「こんなのは結構作られてんのな」

誠人が昨日に引き続き、香織の事が書かれた紙を見せて来た。

「お前、この資料しきょうが作られるのはレベルの高い娘だけなんだぞ？」

誠人が噛み付いてくる。

「変態だな……」

俺は乾いた笑いしか出来なかつた。

「ところで、原田さんってどの原田さん？この学年結構いるからわ
かんねえよ」

「したの名前は紗良つて言つてたぞ」

俺は上の空で答えた。

。

「まあ、私のもあつたんですか」

おつとりしてはいるが、彼女はとても驚いてる様だ。目を丸くして
いる。

「そんなものを作つてているとは、同級生とは言え引く」
「ふと思つて紗良を見た。紗良は目線が
灯は完全に呆れた様だ。俺はふと思つて紗良を見た。紗良は目線が
合うと

「情報元の人。変態」

と言つた。それについては俺も同感だ。

「ところでみんな、この部室が、私は文芸部らしくないと思つていいのだか」

灯が俺達を見渡して言つた。

「確かに、文芸部らしくないですね…」

香織……この人は、香織さんつて読んだ方が楽だな。ともかく香織さんも同意した。

俺はなんとなく原因が分かつてたので、二人に言つた。

「それって、本が無いからじゃねえの？」

その場の空気が固まつた。

「え？ 俺なんか悪い事いつ… 「それだつ！」

灯が突然叫んだ。俺はたじろぐ。

「山陰、凄い事に気がついたな。確かに、文芸部なら本ぐらいある物だ。山陰、明日本を持って来てくれ」

「はい？」

「とりあえず十冊程な。^{じゅうせつ}香織と紗良も持つて来たい本があれば持つて来てくれ」

俺の十冊は強制ですか？ 俺はあまりの事に抗議する気さえ起らなかつた。

脱力して椅子に崩れる。後ろから視線を感じたので振り返ると、紗良がこちらを見ていた。

「あなたの本。ジャンル」

紗良はそういうた。俺は意味を考えてから、紗良はどんな本を持つてくる気なのか知りたいのかと思つた。

「家にある適当な本を持つて来るよ。ジャンルとかもバラバラだな」俺がそう答えると紗良はムッとする。俺は意味を間違えた様だ。再び俺が解説に挑んでいると

「私は色んな本を読みますよ。恋愛物も、学園物も、詩とかも」

香織さんが紗良向かつて言つた。

「わかった。私も」

紗良が笑顔で香織さんに返す。

「ああ！好きなジャンルを聞いてたのか！」

俺はポンと手を打った。紗良が睨んで来る。

俺は「ごめん」と誤魔化して、

「俺はやっぱリファンタジー系かな。あの世界観は引き込まれるね」

俺はそう言つて紗良を見た。紗良は俺の答えに満足した様で、目線が合うと頷いた。

「灯はどんなの読むんだ？」

俺は振り返つて聞いた。灯は一瞬驚いた表情をして、すぐにムスッとした。

「おい？どうした？」

俺は座つている灯に近づいて、顔を覗き込んだ。

「我の好きなジャンルを知りたいのか？」

灯が俺を見上げる様にして問う。目が鋭く光つてるもんだから、上目遣いでも何も思わない。

「我は絵本を好む。」

俺は灯が言つた事を理解するのに、じかんがかかった。

みんなのよく読む本のジャンル。

香織さんと紗良は色んな本を読むらしい。

俺はファンタジー系が好きで良く読んでいる。

そして、この文芸部部長、日之道 灯がすきなジャンル。それは――

「絵本」

だそうだ。笑うなよ。本人は真剣なんだから。

「絵本か……そりやなんでだ?」

嫌な感じに聞こえない様に、俺はなるべくいつもの口調で言った。

「なんでだ? 気になるのか?」

灯は俺を見上げながら言った。

「我が絵本が好きな理由はな、絵本と言つのは、子供達にもわかりやすい言葉で書かれていて、大人でも楽しめる物語が書かれているからだ」

はつきりと答える灯。堂々とした口調としつかりとした理由は、さつき笑いそうになつた自分が恥ずかしく感じる程だ。

「我もあるような物語を創る」

あの文章力でなければ感動しそうな言葉だな。

「灯。物語を創るつて、部誌とかの事とか決めてねえだろ? 俺らはまだ同好会でもねえしれ」

俺は溜息混じりに言つた。

「やっぱり部誌とか書くのですか?」

灯が反応する前に香織さんが聞いて来た。

「一応文芸部ですし、何より部長が乗り気なんですね。香織さんは、書くのはどうですか?」

「書いた事はありません。山陰さんは書いた事あるのですか?」

「いや、ありませんよ。でも書くのも良いんじゃないかと思つてゐる

俺がそう言つと、香織さんはふふっと笑つた。

「敬語、同じ学年なんですし、崩して下さい」

「だったら香織さんも……」

「私はこの方が話し易いんです」

「だったら俺も気にしない事にするよ」

香織さんと談笑していると、腕を引っ張られている気がした。見ると、灯がこっちを向いている。

「部誌は早めに作りたい。どうすればいい?」

普通のお願いの方法だな。まあ、まわりくどい方法より良いか。

「先生に、同好会でなくとも活動できる様にさせてもらわないと。あともう一人入つてくるかだな」

俺は頭にある情報をまとめたのだが、この二つしか思い浮かばなかつた。情けない。

「そうか……難しいのだな。それより、皆が折角集まつたのだ。どこかに遊びに行かなか?」

灯は香織達の方を向いて言つた。

「遊びに行く?」

俺は灯に聞き返した。

「ああそうだ。親睦を深めるのを目的として、皆でどこかに遊びに行こうと思う。場所とかそう言つのは明日決めるつもりだ。」

俺は香織達の方をみた。一人は顔をこちらに向けている。やっぱり急に遊びに行くと言われて困つてているのだろうか?

「楽しみ」

「良いですね。皆さんの事も知る事が出来ますし、何よりも楽しそうで」

二人はそう言つて微笑む。意外とこのメンバーは息があつてるのかな。俺は密かに思った。

其の者達、学校の人気者なり。 4ページ

一年五組

原田 紗良 文芸部

第一印象は活発そうだが、その見た目と違い、口数は少ない。成績は良いが、運動はそこそこ。実は密かに親衛隊がある。告白する者はとても多いが、朝教室で返事をして来るので、男子達としては心臓に悪いようだ。

「…………本當。どんな人でもあるのか」「レは俺は頭を抱えた。灯、香織とあつたから、沙良のがあつても不思議ではないが・・・・・もしかしたら、この学年全員分のがあつてもおかしくないかもしれない。

「何言つてんだ龍夜。若い先生のもあるぞ」まじめな顔で誠人が言つた。その答えを聞いて頭痛がしていく。「…………入学して一ヶ月でそこまでいったか」

「その男子、警察に出せば捕まりそうだな」文芸部室で灯が言つたことは、当然のことだろ。『私の、あるんだ』

沙良も驚いているらしい。目を丸くしている。

「暇人なんですね……」

香織も呆れている。俺も呆れている。部活に入る事を勧めて来たの

はあいつだが、あの資料を見せられたら軽く引くぞ。
「変態の話はおいといて、遊びに行く場所は近くの芦谷公園あしやいのやかにしようと思つ」

灯が机に手をついて言つた。

「芦谷公園つて、あの大きな公園か？」

「そつだ。あの広くて青々とした芝がある公園だ」

「芦谷公園ですか。何時位に集まるのですか？」

「芦谷公園。どこ？」

「紗良は知らなかつたか？なら我と一緒に行こ」

「灯、時間は？」

「十時位で良いだろ」。公園南口の鳥の像の前で集合だ」

「分かつた。楽しみ」

「んじや十時に鳥の像な」

「何か持つて行つた方がいいのでしょ」

「確かに、灯、荷物どうすんだ？」

「山陰、さつきから訪ねてばかりだな。昼食を持ってくればいいぞ」

「分かりました。楽しいことになると良いですね」

「オモチヤ。持つてく」

灯の言葉を皮切りに、俺たちはその場で話し合つた。まるで雑談する様に。いや実際雑談なのが。

それにもしても、公園で遊ぶだけなのか？高校生なんだし、公園でなくとも良いと思うんだが。そう思つてると、灯が立ち上がり、机に両手をついて、部室にいる全員に向かつて言つた。

「では明日は十時に鳥の像の前で集合だ！」

その顔は、やる気に満ちていた。

其の者達、学校の人気者なり。4ページ（後書き）

この回は人物紹介に一番近い話だと思います。山陰君は無いけど、
彼は調べられてませんよ、男性ですから。
さ、次回は、あつそびましょ
おたのしみに

其の活動、遊びとは違うものなり 1ページ

集合時間の十時の三十分前に、俺は鳥の像の前に来た。こうこうものは人を待たせない様に早めに来るのがマナーだからな。

そう思つて鳥の像の前に行くと、香織がもうすでに来ていた。

香織はこちらに気が付くと、にっこり笑つて手を振つた。俺も手を振り返す。

「早いな。待つてたのか？」

「いえ、今来たとこですか？」

そう言つて笑顔を向ける香織。なんだか、得をした気分だ。

「山陰さんも結構早いですね」

「まあ、人を待たせない様にな」

「心遣いが行き届いて……あ、灯さんです」

香織が指を差した方向を見ると、灯と紗良が歩いて来た。二人はこちらに気付くと、かけあしでやって來た。

「一人とも早いな。集合時間の一十分前に揃うとは我も思わなかつた」

「待たせた？」

灯と紗良が像の前に来て言つた。

「いや、さつき来たばかりだ。ところで、公園で遊ぶつて言つたけど、何をするんだ？」

灯は、俺がそう聞くとはつとした表情で固まつた。

「……決めてないのか」

俺は溜息をついた。まさかなんの予定も無しに集まつていたとはな。

「あの……まずは公園を回つてみません?」

香織が少し遠慮がちに言つた。香織の後ろの看板かんばんには、公園内一周散歩コースと書かれていた。

「散歩。賛成」

紗良が真つ直ぐに香織を見ながら言つた。

「つむ、自然を見ながら歩くか…では、右回りか左回りか、どちらで回る?」

「適当でいいだろ」

俺たちはそうして、歩き始めた。

歩いていると会話が弾み、楽しい気分になる。自然に囲まれながら歩くのがこんなに気持ちがいいとはね。そう思つてると、香織と沙良がしゃがんでいた。

「どうした?」

不思議に思つて声をかけると、一人がこちらを向いた。

「この花。誕生花」

沙良が指さしながら言つた。そこには茎が細く、花は外側が黄色く、内側が赤茶色の花があつた。名前はしらないが。

「誕生花か」

灯がその植物を見ながら言つた。誕生花とは、産まれた日時にちなんだ花のことだ。だが「この日にこの花」というのは国や地域によつて違うらしい。一体どこの定義を参考にしているのだろうか?

「へえ。でもよく花の種類が分かつたな。なんかチューリップとかじゃないと見分けがつかねえや」

俺は花を見ながら言つた。

「この花は、多分ハルシャギクです」

香織が花を見たまま言つた。紗良も花を見続けている。

「紗良、この花好きなのか?」

灯が二人の上から覗き込む様にしてきいた。

「私。この花。同じ」

紗良が立ち上がりつて言つた。て事は、ハルシャギクが誕生花の日が、紗良の誕生日つて事か?これで意味あつてるよな?

「そうか、我也自分の誕生花を調べてみたくなつた。紗良、どうやつて誕生花を知つたのだ?」

灯がそう言つて、紗良と歩き始めた。後から俺と香織もついて行く。

「自然是見るだけじゃ無くて、語れる物なのかなあ」

歩きながら、俺は呟いた。

「そうですね。自然を感じるのも素敵だけれども、こうやって話すのも良いですね」

横にいた香織が言った。俺達四人は、談笑しながらその後も公園内を歩いていた。

其の活動、遊びとは違つものなり 2ページ

公園内を歩いた俺達は、休憩しようと、園内の芝生の生えていたところにいた。

「時間もちょうど良いし、皆、ここで歓食しよう」
灯が提案した。俺と香織と紗良は、芝生の上に座っていたから、首を縦に振つて了承した。

「ん？ 皆自作みんななのか？」

俺はコンビニ弁当を取り出しながら言った。女子三人は、俺から見たら小さめの弁当を取り出している。だが三人とも同じ大きさなので、あれくらいが普通なのだろう。

「山陰はコンビニ弁当か？ 食べ過ぎると体に悪いぞ」

いや、普段は普通の食事だよ。

「そばがお好きなんですか？」

「え、これが安かつたんです。

「お金、無いの？」

いや、無い訳じゃないよ。

そんな事を話しながら昼食をとつていぐ。コンビニ弁当なのに、公園で人と食べるだけで美味しく感じる。

昼食を終えると、灯が大きなバックから道具を取り出して、
「食後の運動だ。バトミントンをするぞ」

と言つて来た。

俺らはラケットを持つて、バトミントンをした。バトミントンと言つても芝生の上で、ただシャトルが落ちないようにするだけのものだ。シャトルを追いかける女子三人は、かなり絵になるな。

そう思つていると、頭にシャトルが落ちてきた、どうやら見とれていて気付けなかつたらしい。

「山陰、なにをしている、ぼーっとするな！」

灯がラケットを振りながら言った。スマッシュとつてシャトルを取る。

-----と、

「？ どうかしたんですか？」

俺はその場にしゃがみこんだ。

「どうしたのだ？」

「大丈夫？」

三人が近づいてくる。俺は三人に見えるように地面から今さつき取つた物を見せた。

「四葉のクローバーだ」

四葉のクローバー。幸せのお守り。それを見せると、三人は驚いた。まあ、珍しいもんな。

「よく見つけましたね」

香織が目を丸くしている。これは珍しい。

「すごい。すごい！」

沙良が本気で驚いてるようで、同じ言葉を連発している。これも珍しい。

そんな中、一人はやっぱり予想どおりの事をしてくれた。

「よし！ではもつと四葉のクローバーを見つけよう！一人一本はほしいな」

灯が、弾んだ声で言った。

「「おー」」

勢いが弱いながらも拳を突き上げる香織と紗良。俺は四葉のクローバーを探すという地味な行動に、脱力した。

「結構探したけど、結局見つかったのは三つか……」

太陽も沈みかけ、夕焼けに染まる空を見ながら俺は言った。見つかった四葉のクローバーは三つ。一人に一本では、あと一つ足らない。

まあ、珍しい物だし、三つ見つけただけでも凄いかな？

「ふむう。日が暮れてしまつては探し難いからな」

「別にいいだろ？ こうやって楽しく過ごせたんだしよ」

夕日を見ながら俺は言った。今回の遊びは、それなりに楽しめたんだ。

其の活動、遊びとは違うものなり 3ページ

公園での遊びをした後の月曜日。 文芸部室に集まつた俺達に、 灯は原稿用紙を手にしながら言つた。

「皆みんな。この前行つたレクリエーション。公園の事をこの原稿用紙に書いて欲しい」

「は？」

俺は素つ頓狂な声をあげた。 香織と紗良は灯の方を向いている。

「だから、運動会の感想と同じ様な物だ。 文芸部部長としては、部員がどのような文章を書くか見てみたいのでな」

あの文を書くお前が言つか。 … でもまあ、あれがただの遊びじゃ無くて、文を書かせる目的があつたのか。

感心していると、田の前に原稿用紙。 灯を見ると、シャーペンを持って書き始めている。

俺も筆箱ふでばこを取り出して、書き始めた。

えつと、まずは昨日した事だ。 確か集合して、公園の散歩をして、お昼けいじゅを食べて、運動をして、クローバー探しけいじをしたんだ。

うん。結構書く事があるな。

香織と紗良も書き始めている。 その光景を見て、文芸部らしいなあと俺は思った。その後、再び俺は書く事に専念する。 適当に感想を入れながらやつた事を書くだけだ。

数十分して、皆みんな書き終えた様だ。俺は一息ついて、発案者である灯を見た。 灯はとうに書き終えていたのかだれでいて、机に顎を乗せている。 紗良は鉛筆を転がして、香織は灯を見ている。俺はこのままでいる訳にも行かないでの、声をかけた。

「おい灯。書けたぞ」

声をかけると灯は飛び起き立ち上がった。

「そうか！書き終えたか。では我が預かるから、皆、持つて来てくれ」

俺は微笑んでいる灯に原案用紙を渡す。と、香織も横から灯に用紙を渡した。

香織は俺を見て、微笑んだ。そのとても柔らかな笑みに、俺は一瞬、固まってしまう。

そのあと紗良も無事提出して、本田は解散となつた。

其の活動、遊びとは違つものなり。 4ページ

次の日。

俺は長々とした授業を終え、文芸部室に向かつていた。香織は委員会。紗良は掃除当番で遅れると言つていた。俺は旧館の中を通り、文芸部室の扉を開いた。

「灯。いるかー？」

そして、俺は固まつた。棚が一つと、学校の会議で見かける机と椅子しか無い部室。その中で、一つの机の上に、突つ伏して寝ている灯が居た。近づくと、灯の手元に昨日書いた公園での事の作文があつた。俺は灯を起こさない様にそれを持つ。

部員全員で公園に行つた。とても楽しかつた。

相変わらず、短い文章だ。

俺は原稿用紙を一枚めくる。そこには、「木茎葉 香織」と書かれていた。

土曜日に、文芸部のレクリエーションとして、部員全員で公園に行つた。今思い返してもとても楽しいもので、特に私が楽しいと思つたのは、公園内で行つた鬼ごっこだ。

鬼ごっこは、勿論子供達がやる様な追いかけっこのことだ。しかし、公園内を大きく使つた鬼ごっこはとても楽しく、面白いものだつた。あちこち走り回り、追いかけ、追いかけられて。気が付けば、お昼になつていた。

みんなでシートの上でとる食事はピクニックの様で、それまで走

り回っていたからだろ？が、とても美味しかった。

凄い文章だな。さつき読んだ物と比べると、特に。あの時の鬼ごっこは面積が広かつたから鬼になると大変だつたな。

そんな事を考えながら原稿用紙をめくる。

俺のだったので飛ばして最後、「原田 紗良」と書かれた文章を読む。

この前公園に行つた事が、この作文を書くためだとは思わなくて、私は驚いて、何を書いたら良いか分からなくなつて、とりあえず、最初に公園を歩いた事でも書こうと、考えて、書いてみる。

公園内での散歩は、木々に囲まれて、とても気持ちの良いもので、私達は、色々な話をして歩いていると、整備された道の脇に、綺麗な花があつて、私が知っている花もあり、その花についてみんなと話した事は、凄く楽しくて、また行きたいと思つた。

……これは意外な文章だな。

いつも無駄の無い言葉で喋つてるから、てっきり文章も同じ感じだと思っていたが、「。」が一つしか無い。

今読んだ作文を見ると、一番上手なのは香織つて事になるな。

俺は原稿用紙を元の位置に戻した。灯はまだ寝ている。寝心地が悪いのか、顔をしかめている。俺は灯の向かいの席に座つて、持つて来た本を読み始めた。

しばらく読んでいると、扉が開いた。目を向けると、紗良が鞄を持

つている。

「よう。すまんが、少し静かにしてくれ」

そう言つて俺は灯を指差す。紗良は灯をみて納得した様で、俺の隣に座つた。俺は本を読んでいたが、紗良がさつきからこちらを見ているようで、落ち着かない。

「なあ紗良、どうかしたのか？」

視線に耐え切れなくなつて、俺は紗良に話しかけた。

「本、取つていい？」

そう言つて紗良は紙袋を指差す。紙袋のなかには、俺が持つて来た本が入つていて。

「ああ、良いぞ」

俺がそう言つと、紗良は紙袋を取つて、中の本を見ていいく。その時、部室の扉が開いて、香織が入つて来た。

「こんにちは。あら、灯さん、寝ているのですか？」

扉を閉めて、灯を見る香織。

「ああ、だから少し静かにしてくれ」

俺は本から顔を上げて言つた。香織はこちらを見て、笑顔で頷いた。そして、その横にいた紗良を見て、紗良の足元にある紙袋をみて、俺を見た。

「あの…この本、全部山陰君が？」

紙袋を指差しながら、香織が言つた。

「ああ、持つて来いと言われてたしな。だが流石に十冊は重かつた」

俺はそう言つて肩を回す。

「一回にそんな多く持つてこなくても良かつたのに…」

「ははっ。そうだな」

香織は笑つて、紙袋の中に手を伸ばす。

「んんっ」

その時、灯が声を上げた。俺はビックリして灯を見ると、灯はもぞもぞと動いて、顔をこちらにむけた。まだ眠そうな顔をしている。

「んむう。皆居たのか？」

俺は本を閉じ、笑いながら言った。

「ああ、皆そろってゐるぞ」

其の活動、遊びとは違つものなつ。 4ページ（後書き）

小学校の遠足とかは、後口必ず感想を書くんですよね。書くのは凄く面倒で、白紙の原稿用紙を睨んで居ました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9079x/>

我的小説は偉大なり

2011年12月21日18時54分発行